

先生。法ってなんのために あるんですか？それが図書館の 未来とどう関係するんですか？

2020.1.31 (金) 19:00-21:00

東京学芸大図書館カフェ note cafe

一般 ¥1500・学生 ¥500 いずれも1ドリンク付き

前田先生と

一緒に

世界を面白がる

トークゲスト：前田稔 准教授

東京学芸大学・総合教育科学系

マスター：藤井健志 教授

東京学芸大学・人文科学講座 / 元 副学長

聞き手：熊井晃史

東京学芸大こども未来研究所 / とをが



【お申し込み】

席に余裕がある場合は当日受付も可

Vol
35

「図書館の本質とは―」と前田先生が話し始めた時、図書館の神様が必ずや降りてきて、カフェのどこかで前田先生の話をもじって聞いていたに違いない。それだけ、前田先生の話は重要で、深いものだった。しかしだからと言って、カフェにおいて、しかつめらしい話が延々と続いたわけではない。時々、歓声だか奇声だかわからぬが、嬉しそうな声を発しつつ、にぎやかに、前田先生はお話を進められた。劇作家の井上ひさしの言葉をもじって言えば、重い話を軽く、軽い話を深く、深い話を楽しく語ってくださったというところだろうか。

前田先生は、学芸大学では学校図書館について教えているが、法学部のご出身である。アメリカの裁判所の判例についての論文も書かれている。その前田先生の考えによると、図書館（特に公共図書館）はパブリック・フォーラム（public forum）である。パブリック・フォーラムとは、すべての人に表現の自由と、表現されたことを知る権利を保障する公共の場所のことだ。道路や公園もパブリック・フォーラムだが、図書館もそうだという。アメリカの裁判事例の中で浮かび上がってきた概念である。もちろん、そこには制限が必要だという考えも強い。アメリカの裁判所でも、パブリック・フォーラムをめぐる丁々発止のやりとりが続けられているらしい。

表現の自由や、知る権利は、日本でもよく知られていることだが、それをパブリック・フォーラムという概念を媒介として、アメリカの法律理論に結び付けたところが、前田先生の慧眼であろう。多様な価値観が存在するアメリカでは、どの方針や考え方を選ぶかを定めるプロセスが厳密に定められている。何しろ、自説こそが正義だと主張する人が多いので、そのうちのどれを選び取るかということを決めるプロセスこそが、重要なのである。そのプロセスの中心は、徹底的に議論をすることである。それを経ずに、勝手にこの考えは正しいとか、あの考えは間違っていると決めることはできない。アメリカの民主主義は、実は、この民主的なプロセスに宿っ

ているのである。前田先生が、「民主的なプロセスは一度傷つくと立ち直るのが大変」と心配されているのも、プロセスこそが重要だからである。

アメリカの公共図書館では、パブリック・フォーラムであればこそ、予算からどの本を置くかということまで、徹底的に議論をする。ちょうど2019年に、日本で「ニューヨーク公共図書館」というドキュメンタリー映画が公開されている。今回の「まちのカルチャーカフェ」に来られた方の中にも、ご覧になられた方がいた。あのきわめて長時間の映画の中で、延々と描かれていた図書館の様々な場面は、あそこがパブリック・フォーラムだということを前提にして見ると、たいへんよく理解できる。いろいろな人たちが、しょっちゅう議論をしていたものね。こうした議論を通して、図書館の公共性は保たれていたのだ。

しかし公共図書館に比べて、学校図書館はさらに難しい問題を抱えていると、前田先生はおっしゃる。学校図書館には教育上の目的があるため、表現の自由や、知る権利に対する制限が、より厳しくなるからである。アメリカでは、学校図書館の領域においても、あんな本・こんな本は置くべきではない、いや置くべきだ、という激しい議論が行われている。でもアメリカの裁判所のある判例は、私たちを勇気づけてくれるのではなからうか。生徒は図書館で「知らないことを探求しつつ、興味のある領域を発見し、所定のカリキュラム外の考えを見い出すことができる」。そしてここから生徒は、「生涯にわたる自発的な学習と豊かさへと歩みはじめる」というのである。このことを判例では、「図書館の魔法」と呼んでいる※。

自由な図書館こそ生徒を育むという考え方は、自由に関する厳しい議論から生まれたものであり、自由に議論ができる環境の中ではじめて生まれうるものである。自由は目的でもあるし、プロセスでもある。この背景には、自由を求める過酷な闘争があったのだと思う。私たちも共感するところが多いが、しかし、日本人の共感は、単に議論の上澄みをなめているのに過

ぎないのじゃなかるうか。そのように申しあげたら、前田先生は、急にお手元にあったお茶の上澄みをなめ始めた。まだ日本においては難しいということなのかもしれない。

図書館には極端な思想の本は置くべきではないのかとか、インスタ映えする昨今話題の図書館は本当に図書館なのかとか、ホームレスの人が図書館で寝るのは認められるべきなのかといった、図書館をめぐるいろいろな話題が、先生からも聞き手からも出されていた。その中で、先生が本には心が入っているはずだ、図書館は心と心とが出会う場である、とおっしゃったのが印象的だった。

当日、先生は大量の資料を持ってきてくださった。あれほど大量の資料が配られたのは、我らの「まちのカルチャーカフェ」では初めてのことだ。前田先生は、「たくさんの紙を配るのは、目くらましです」なんておっしゃっていたけれど、ご自分のまじめさに対する照れだと見た。

※前田稔・川崎良孝「学校図書館蔵書をめぐる裁判事件(1)」『アメリカにおける学校図書館蔵書をめぐる裁判事例の総合的研究』(科学研究費補助金報告書、2004)、22頁。

藤井健志

東京学芸大学教授・元副学長／まちのカルチャーカフェ主宰・マスター
東京学芸大図書館カフェnote cafe 発起人

